

地下 ひずみ 広く 変化

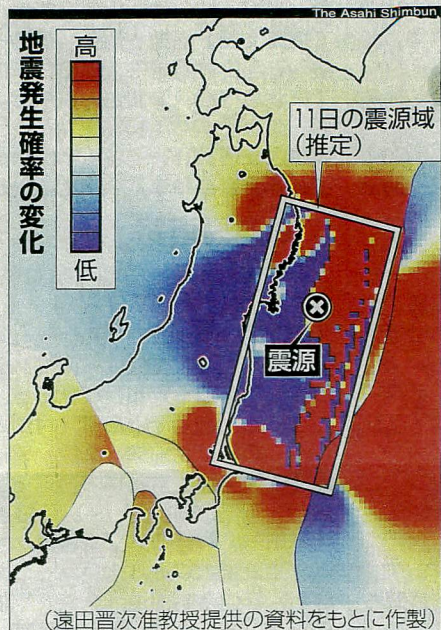
地震発生確率に影響

東日本大震災の影響で、地下の力のかかり方が変わり、地震発生確率がわずかに変化する場所が広範囲にわたることが、京都大防災研究所の遠田晋次准教授の解析でわかった。房総沖や中部地方の活断層にも影響が及び、ごくわずかなだが、地震活動を活発にする可能性がある。

ただし、断層のタイプによって影響の受け方は異なり、仮定も含んだ結果だ。もともと地震の発生確率が高いところから地震の発生確率が高いつき警戒が必要という。

北海道から中部まで

大きな断層がある。11日の地震は巨大だったため、影響は北海道から中部まで及ぶことがわかった。遠田さんは、領域ごとに影響を受けやすい断層のタイプについて地震活動の変化を推定した。図。



(遠田晋次准教授提供の資料をもとに作製)

11日の震源域の北と南では発生しやすくなり、離れた場所でも、ごくわずかながら、発生しやすくなる場所があった。15日の静岡の地震も影響を受けた可能性があるという。伊豆半島の東側の相模トラフと呼ばれる海域では発生しにくくなる変化が出た。「地震が巨大だったため、影響が及ぶ範囲が広がった」と遠田さんは話す。名古屋大グループも同様の解析を行い、今回の地震が引き金になって、ただちに東海地震や東南海地震の発生を早める影響はほとんどないという結果を発表している。(瀬川茂子)